会報

No. 56

平成14(2002)年1月15日

京都府図書館等連絡協議会

事務局

京都市左京区岡崎成勝寺町9

京都府立図書館内

TEL (075)762－4655

京都市図書館の目指すもの

京都市中央図書館長　梶村　健二

京都市図書館は今年で設立二十周年を迎えた。この二十年間で、図書館数は三中央館及び十五地域館ならびに子育て図書館の十九館となり、蔵書数百五十万冊、年間貸出冊数五百二十万冊、市民一人当たり貸出冊数三・六冊と京都市の図書館行政は大きく飛躍した。利用者の生活時間に応じた夜間祝日開館についても、中央館は開館当時から、地域館でも既に左京、下京で実施している。今後、順次拡充を図っていく予定である。

京都市図書館は、発足当初から運営を委託するということで多くの論議を引き起こしてきた。当時図書館の委託は全国でもはじめてのケースであり、文部省や図書館関係者の中には反対の意見が多くあった。教育委員会内部では教育長以下で白熱した議論が連日連夜行われた。京都市の図書館はどのような図書館を目指すのか、その方向性を明確にすることがまず必要であった。市民の方々が気軽に利用できる、下駄履きの図書館、市民に開かれた図書館にしようということから、役所のややもすると硬直したシステムを廃し、民間の柔軟な発想の運営形態を模索していった。その結果、京都市が設置する財団に管理運営を委託することがわれわれの目指す図書館の運営にとって最適であるということになった。もちろん行政の責任を放棄するものではなく、むしろその責任を明確にした上での適切な運営方法であったと考える。このことは冒頭に述べたこの二十年間の実績を見れば明らかである。地方分権の今日、それぞれの自治体が地方の実態に合った適切な方法で市民サービスを実施していくことが重要である。

平成九年から五カ年計画で取り組んできた「京（みやこ）・ライブラリーネット」が昨年秋に完成した。週四回運行のブックメールシステムとあいまって市内十八館どこでも全市の蔵書検索、貸出、返却が可能となり、利用者に大変好評である。今後は十八館で一体となった京都市の図書館として統一性ある運営が求められており、共通マニュアルのシステム化を急がねばならない。一方、各館の地域性を踏まえた特色作りも急務である。京都市全体のあるべき蔵書構成を基本にしながら、それぞれの図書館の個性化を進めていきたい。

ここまで京都市の図書館サービスは拡充できてきたが、情報化への対応など課題も多い。特に狭隘な中央図書館に替わる新中央図書館の具体化は大きな課題である。平成十一年に審議会答申をいただき、平成十五年に基本計画策定を目指しているが、逼迫した本市の財政状況から実現までにはまだ時間を要するものと思われる。電子図書館の今後の推移等図書館を巡る状況の変化を慎重に見極めることが必要である。この厳しい冬の時代に、豊かな想像力、柔軟な発想力を発揮するとともに、情熱を持続して、利用者及び多くの市民の意見を聞いて、職員一体となって、市民のための、市民に必要とされる図書館の実現に努めていきたい。京図連協の皆様方の今後一層のご指導、ご支援をお願い申し上げるしだいである。

京都市中央図書館長を拝命し、約十カ月過ぎたが、図書館は人と人とのつながりの空間だとつくづく感じる。職員と利用者、利用者と著者、職員と著者、図書館にかかわる全ての人々との心のつながりを大切にし、人の輪、和をさらに広げていきたい。

宿泊研修(南部会場)開催される

今年度の宿泊研修会は九月二十日(木)午後一時半から二十一日(金)正午までの二日間、南部の京田辺市立中央図書館を研修会場にして実施されました。参加者は部分参加も含めて二十四名でした。

一日目の二十日は研修研究委員会の福知山市・一井館長の挨拶の後、京都新聞社ニュースデスク担当キャップの塚本宏氏から「魅力ある広報紙づくり」のテーマで講演をしていただきました。講演では、読みやすい広報紙にするためには、人目を引く見出しとレイアウトの大切さを強調されていました。講演後は宿泊先の京都厚生年金休暇センターへ移動し、交流会では講師の塚本先生にも加わっていただき話は大いに盛り上がりました。

二日目の二十一日は、各図書館から事前に集められた「図書館だより」や研修会当日に作成したチラシなどをもとに、講師の先生から具体的な指摘やアドバイスをいただきました。新聞と広報誌という違いはありますが、「人に伝える」ことのむずかしさと大事さを実感し、非常に意義のある研修会でした。

平成13年度宿泊研修(南部会場)開催

宿泊研修会に参加して

宇治田原町立図書館
伊藤　麻美子

「魅力ある広報紙づくり」をテーマに、京田辺市立中央図書館で京都新聞社の塚本宏記者のお話を、二日間にわたって楽しく聞かせていただきました。

図書館広報としてのたより作りは、通常業務の合間にこなそうとするせいか、どうしても決まりきったスタイルになりがちでした。作る側にとってはある程度満足のいくものであっても、それが「読む」側の利用者にとって魅力的であるとは限らないということを改めて認識しました。

研修会の中では、それぞれの館の広報紙を実際に例にとって、アドバイスをいただきました。またレイアウトの方法を教えていただき、伝える内容が同じであっても、工夫次第で読者をより惹きつけるものに変えられることを学びました。

今回参加して、これからの図書館における情報発信についても見直す良い機会になりました。

研修会で得たことを、今後の図書館だより作りに生かしていきたいと思います。

研修講演録

「魅力ある広報紙づくり」

塚本　宏

私は新聞社で、直接取材を行う外勤記者とは異なり、紙面の見出しをつけてレイアウトをする内勤記者の仕事をしている。新聞は見出しで大体の内容がわかるようにしており、記事は興味のある人だけが読むものと考えている。それだけ見出しは大切なもので、それに加えて読んでもらうための努力が必要となる。

広報紙づくりのポイントとして、まず狙いを定めることが重要で、不特定多数の人が対象の図書館の広報紙はどんな人に読んでもらいたいのかを考えることで、文章と活字の大きさが決まってくる。また、発行のタイミングにも注意しなければいけない。文章は基本となる5W1H(いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どのように)をわかりやすい言葉で短く簡潔に書くようにし、そこから導かれる結論が重要である。人に伝える文章は、「自分はわかっている」という前提で考えがちだが、「相手は何もわかっていない」ことが多い。一からスタートのつもりで、やさしく読みやすい文章を書くように心がけなければいけない。記事などは効率よく配置し、できるだけ情報量を多くするように考えるとよい。これらのことの前に担当者の間で企画会議を行うことが不可欠であり、この会議がどこまでやれているかが重要である。その中では、今までの慣例を踏襲することなく、柔軟な発想と新しい視点・切り口で臨み、少し過激なぐらいの方が出来上がりが丁度いいものに仕上がってくると思う。見出しと紙面体裁と文章は関連し合っており、読む人にインパクトを与える必要があるので、そのための工夫は惜しまないように心がけてほしい。

具体的な紙面づくりにあたっては全体の紙面の中で上部の逆三角形のゾーンに視点が集まるので、そこに写真、見出し、記事などをバランスよく配置すると効果がある。また、できるだけ見出しをつけるようにし、見出しは八字から十字ぐらいが適当である。そして、時代を反映する表現にしたり、字の大きさ、書体を変えると印象度が違ってくる。

身近な図書館に感じてもらうために、図書館だよりは職員の顔が見えるような、心の伝わるものにしてほしい。また、これからはインターネットやメールマガジンなど紙以外による広報も拡大すると思うので、「どうすれば人に伝わるか」を考えて、魅力ある広報に取り組んでいってほしいと思っている。

全国公共図書館 奉仕部門研究集会

～二十一世紀をひらく図書館サービス

十月十八・十九日の二日間、約三百七十名が参加して神戸市の明石海峡大橋近くの会場で開催されました。

◎開会式・基調講演

開会式後の基調講演で井上章一国際日本文化研究センター助教授は「本を求めて」と題し歴史研究に古本は欠かせないこと、歴史の定説を正すのに図書館資料を活用した経験から資料収集の重要性を訴えました。

◎事例研究

第一部会「暮らしに生きる図書館を」

横浜市中央図書館は市役所と連携・協力する「庁内情報拠点化事業」を、また僅か一年の準備期間で開館した兵庫県滝野町図書館からは「楽しい貸出」と「暮らしに役立つ」図書館を追求する報告がありました。

第二部会「子供と本を結びつける」

富山県小杉町民図書館は学校図書館とネットワークを構築して支援サービスをし、また大阪府八尾市立八尾図書館は「子供も一人の利用者」の原点に立ち返る必要性を提起。

◎情勢報告・閉会式

横山桂日本図書館協会事務局長から公共図書館の現状と将来展望の報告があり、集会を終えました。

☆後　記　小規模図書館の意欲的な取組に参加者の質問が集中しました。

全国公共図書館 奉仕部門研究集会に参加して

京都市醍醐中央図書館　**庄　加寿美**

壮大な明石海峡大橋を望む素晴らしい立地条件の中、研究集会は行われました。

どの講演、どの発表、どの報告も大変勉強になり今後に生かしていきたいものばかりでしたが、中でも最も興味深かったのは、「現場」におられる方々の事例発表です。私は、「子どもと本を結びつける」をテーマにした第二部会に参加しました。

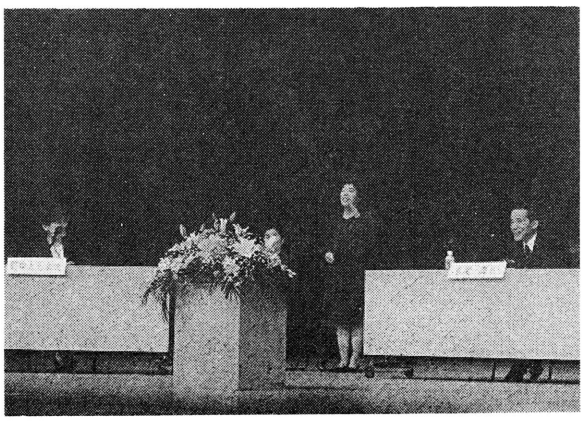
「小杉町における学校図書館支援サービスについて」では、学校図書館との「連携」の前に、学校図書館を「支援して自立させる活動」を行っておられるとのことでした。中でも「自立がなければ連携はない」という言葉はとても印象的でした。自館でも学校協力貸出を行っていますが、このことはとても実感します。

そして「こどもだって立派な利用者です！」では、「児童サービスの主はあくまで子供」であり、「一個人として向き合いきっちりと要求を受け入れていく」という、日頃忘れてしまいがちな「児童サービスの基本」を再認識することができました。

今回学んだことを生かし、これからも魅力ある図書館づくりをしていきたいと思います。

第10回京都図書館大会（2001.9.12）

宿泊研修・南部会場（2001.9.20～21）



第87回全国図書館大会（2001.10.24～26）

全国公共図書館奉仕部門研究集会（2001.10.18～19）

京都図書館大会開催される

第十回京都図書館大会が、去る九月十二日に、新館間もない府立図書館で開催されました。日本図書館協会百周年を記念して、九二年に第一回が開催されて以来、毎年、京図連協、府学校図書館協議会、日図協京都選出評議員等により実行委員会を組織し開催されています。

当日は村上康夫実行委員長（京図連協会長）の主催者挨拶、日図協酒川常務理事の情勢報告を兼ねた挨拶に続き、同志社大大城善盛教授から、今大会のテーマ「二十一世紀の図書館像を探る」に沿った特別報告が行われました。その後、参加者一同、館内の見学を行い、午後は「ITと図書館」「総合学習と図書館」の二つのテーマを柱に報告が行われました。「ITと図書館」では、京都大総合人間学部図書館冨岡達治氏と府立図書館の川上元氏の報告があり、続いて「総合学習と図書館」をテーマに、太秦小学校教諭小河富代氏と亀岡市立図書館長田川幸男氏から報告され、その後の交流協議も熱を帯びたものとなりました。

今回は遠く新潟、愛媛、岡山等他府県からの参加も多く、例年を大幅に上回る百七十名（内府内公共図書館四十三名）の参加によって、第十回記念に相応しい熱気あふれる大会となりました。

京都図書館大会　9/12　府立図書館

京都図書館大会に参加して

京都府立総合資料館
平居千明

大会に、今回初めて参加させていただきました。

昨年に引き続き「二十一世紀の図書館像を探る」をテーマに同志社大学の大城教授の特別報告の後、大学、公共、小学校の各図書館から独自の取組みを含めた報告を伺いました。

大城教授の報告ではいろいろ勉強させていただきましたが、特に興味深く伺ったのは、精華町立図書館・石狩市立図書館に例をあげられたような滞在型図書館についてでした。情報サロンと呼ばれるような情報が交流・交換される場所、資料の提供だけでなく、情報の提供の場所としての図書館に今後の図書館像を考えさせられました。

また、報告の結びでは、既存概念を疑い、どこがおかしいのかを考え、おかしいと思うことは原因を探り、そして改善策を考え、よりベターな方法がないかを考えてほしいと述べられました。

私の場合、現在の職場は一年目ですが、まずは既存概念や方法を理解したうえで、単なる批判のみに終わるのではなく、「ではどうするのがよいのか？」という前向きな批判の目を持つことが大切ではないかと思いました。

全国図書館大会に参加して

京都市中央図書館
田中せつ子

情報通信技術（IT）の発達は、図書館サービスを大きく変えるものとなっています。その中で、図書館はどうあるべきかを「IT時代の図書館像を考える」というテーマのもと、活発な意見交換がなされました。

一日目の野中ともよ、長尾真、月尾嘉男の各氏による鼎談では、図書館サービスは、技術で補えるものは、解決していくが、さらなる図書館サービスの方向は、物事を判断する材料としての適切な情報を提供していくことにある、というものでした。

また二日目に参加しました「IT時代どう考える？公共図書館！」（第一分科会）で紹介されたアメリカの例は、一日目の鼎談の実践例として示唆に富むものでした。

三日目は、小田光宏氏の司会で、三名のパネラー（糸賀雅児、根本彰、三谷久子の各氏）によるシンポジウムでした。各氏の立場から、著作権、職員問題等が出され、会場参加者との質疑応答も盛んになされました。

この全国大会三日間を通じて、図書館員として、情報選択能力や、コミュニケーション能力の重要性を感じました。

全国図書館大会　10/24～10/26　岐阜市

人のつながりの大切さを再認識

京都市伏見中央図書館
永島博子

今回全国大会に参加し、私は新鮮で意義深い刺激を受けました。IT時代の図書館像を考える、という主題のもとで、開かれた大会は、まさに時代を象徴した問題提起であったと思います。

私は、現在勤務している図書館での仕事の中に、児童への働きかけに重点を置いた取組みがなされていることを考え、二日目の分科会は、児童・青少年サービスの部門を選びました。そこで福音館書店の松居直氏の講演を聞き、あらためて、言葉の大切さ、絵本は読むのではなく、語るものであること、等を再認識させていただき、日頃取組んでいる絵本の読み聞かせに結びつく、力強い共感を得ました。

また、北海道や岐阜、石川県でなされている実践報告を聞き、各地での熱い取組みに、大きな刺激を受けました。そして、時代がITへと変化を遂げても、図書館での人と人とのつながり、本を手渡すのは人である、ということで、失われてはならない心と心のつながりの大切さを再認識しました。

日常業務から一歩飛び出して、こんな研修の場を与えていただいた三日間は、私にまた学ぼう、頑張ろう、というエネルギーを充電させていただいた三日間でした。

LIBRARY NEWS

京都市下京図書館

☆夜間祝日開館実施　利用者数は一・五倍

平成十三年七月十八日、下京図書館は新しく生まれ変わりました。

コンピュータを導入し、図書館情報網「京（みやこ）ライブラリーネット」に接続することにより、他の京都市図書館の蔵書についても検索が可能となり、貸出し・返却もできるようになりました。

また、平日午後七時三十分まで夜間開館するようになり、勤めを終えたサラリーマンやOL、夕食までのひとときを過ごす家族連れに好評です。

新しい図書館は、特別養護老人ホームや児童館などを含む複合施設の四階に位置し、床面積は六一六㎡になっています。蔵書数は現在五万冊ですが、近い将来には八万冊となる予定です。

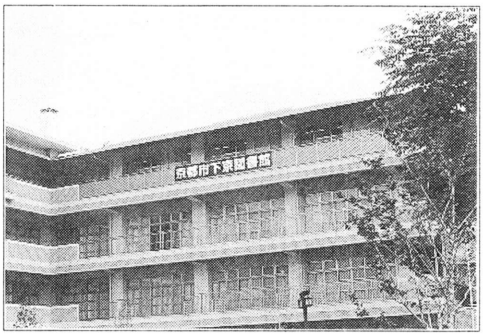
外観は勾配屋根を幾重にも重ねたデザインで、周辺の町並みにうまく溶けこんでいます。また、図書館への専用エレベーター棟の頂部には祇園祭の山鉾の意匠を採用し、この建物のシンボルとなっています。

館内は、できるだけ表示を少なくし、カーペットタイルの床、木製のインテリア、コルクタイルの幼児コーナー、自動開閉できる天窓など明るく暖かい雰囲気を醸し出しています。

つい手にとりたくなるような利用案内は好評です。大人用は本の形をして見やすくなっており、こども用は「まねき猫」のデザインで、しおり形式を採用し、こどもたちを本の世界に招いています。

ビジネス街（下京区新町通松原下る）に移転することにより、こどもの利用が少なくなることを心配しましたが、児童館との併設による相乗効果もあり、貸出しは大幅に増えています。

新築移転を機に、市民に親しまれる地域図書館として、なお一層努力していきたいと考えています。



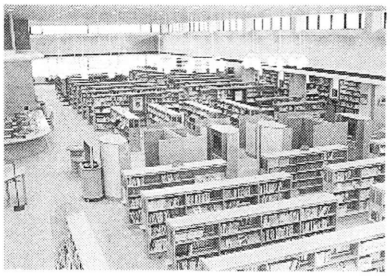
精華町立図書館

☆新図書館がオープン！

学研都市の中核地である精華町に新図書館がオープンしました。平成八年に基本構想策定委員会が設置されてから五年の歳月を経て、今春四月二十八日に開館の運びとなりました。

新図書館は延床面積二二八六㎡、開架部分は一二三〇㎡のワンフロアで旧館の約五倍の広さになりました。蔵書冊数は九万二千冊で収容能力二十万冊の、新庁舎と隣接した図書館です。玄関は庁舎と共用で交流スペースから館内を一望でき相乗効果は抜群です。内部は明るく暖かみのある木調で統一しており天井が高いため開放的な空間がより館内を広く見せています。

子どもコーナーとブラウジングコーナーは欅の茂る南側に位置し、中央にプライベートを優先したAV視聴や資料検索ボックスを設けています。子どもコーナーには「おはなし室」「上足コーナー」「あずま屋（仮称）」そしてバーバパパの木製汽車（書架）などを配しています。北側は田園風景が窓外に開け、落ち着いて読書や調べ物ができるレファレンスコーナー、東側に掘り炬燵式たたみコーナー、芸術コーナーと順に並んでおり、ゆったりとくつろげる滞在型図書館として人気を呼んでいます。貸出しは旧館時代の二・六倍に増え九月十八日現在で過去の最高年間貸出冊数十四万八百八十五冊を越えました。特に新設の「暮らし」「ティーンズ」コーナーでは、書架の空間が目立ち早くも本不足が起こってきております。限られた予算内でリクエストに応えていくために府立図書館をはじめ府下の図書館に協力をお願いしているところです。



また郵政事業庁による広域的情報通信ネットワークが整備され、十二年二月より資料検索がリアルタイムに検索可能になりました。加えて相楽郡広域貸出しも徐々に住民に浸透してきており町外の登録者は現在千六十四人で全体の十パーセントを占めています。

町の本棚として、また人々の知的ふれあいの場として待ち望まれた新図書館が今完成しました。厳しい財政状況のもとソフト面では問題が山積していますが、地域に根ざした親しみある図書館としてますます町民に利用して頂くことを願っています。

☆★専門委員会ニュース★☆

◎ネットワーク特別委員会

府図書館総合目録参加館も、本年度に入り順調に推移してきています。

参加状況は次のとおりです（十二月四日現在）。A参加（データ提供館）は、久御山町、亀岡市、美山町、八木町、三和町、向日市、岩滝町、綾部市、京田辺市、井手町、府立、府資料館、京都学園大、長岡京市の十四館で、引き続いて八幡市、舞鶴市東・西、宇治市、福知山市、日吉町、園部町などのデータが登録される予定であり、年度内にはデータ提供館は二十館を上回る予定です。

またB参加館（検索館）は山城町、木津町、加茂町、精華町、夜久野町、宮津市、加悦町、伊根町、野田川町、峰山町、大宮町、ライトハウスなどがすでに加入済みであり、今後大山崎町、宇治田原町、和束町、京北町、和知町、大江町、網野町、丹後町、弥栄町、久美浜町などの参加が予定されています。従って、今年度内にも、A・Bいずれかの参加館が四十数館を上回ることがほぼ確実となっております。

京図連協としても、総合目録ネットワークの実現に向けて、一層の努力を行っていきたいと思っています。

◎研修研究委員会

十月二日の理事会において、三ブロック研修が承認され、予定どおり実施されております。すでに終了した研修会につきましては、それぞれの報告をご覧ください。

○南部（一泊）研修

九月二十・二十一日

ところ　京田辺市立中央図書館

テーマ「魅力ある広報誌づくり」

講師　塚本　宏氏（京都新聞社ニュースデスク）

○北部研修

十一月二十九日

ところ　福知山市立図書館

テーマ「ブックトーク」

講師　北畑　博子氏（京都科学読み物研究会）

○中部研修

一月二十四日

ところ　府立図書館

テーマ「インターネット検索講習」

講師　府立図書館職員

府下図書館が参加するネットワークシステムも、十四年度にはほぼ完成するようです。インターネット検索を学習して、事務処理がスムーズに行えるよう期待します。

◎相互協力委員会

九月二十八日に平成十三年度の第一回相互協力委員会を開催。

委員会では府立図書館の市町村からのリクエスト対応について要望が多くだされた。

十一月二日に相互協力委員会実務担当者会議を開催。

実務担当者会議では、相互協力委員会の要望を受けて府立図書館から「相互貸借の流れ」について迅速な対応を図るため、市町村リクエストへの対応について変更が説明された。

1　K－LibnetのDBになかった時点でリクエストを受けるもの。

①高額図書

②直販・自費出版等で、通常の書店ルートでは購入できない資料

2　K－LibnetのDBにあるが貸借できなかった時点でリクエストを受けるもの。

③出版後一年以内の資料で、K－LibnetのWanted・Fax版Wantedで相互貸借が不成立と予測される資料

また、同時にK－LibnetのWantedとFax版Wantedを同時期に出すことも委員長から提案され了承された。

これらの処置は十一月中旬から実施された。

◎広報委員会

第二回～第四回広報委員会をそれぞれ平成十三年七月五日、九月二十七日、十一月二十一日に開催し、会報五十五号～五十七号の編集について協議を行いました。

次号五十七号は、三月十五日に発行する予定です（今年度最終号となります）。

♣編集子♣

新年明けましておめでとうございます。

昨年はアメリカの同時多発テロや狂牛病騒動など、従来にないタイプの事件が発生しました。

図書館でも、最近はイスラム関係の資料や、狂牛病の原因とされるタンパク質「プリオン」の解説書などを求める利用者が多くなってきています。

悲惨な事件は起こってほしくないのですが、その一方で、社会の変化に応じ、今現在求められる資料が何なのかを的確に把握する必要性を感じています。